

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780500

研究課題名(和文) 音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力を育成するカリキュラムの開発

研究課題名(英文) Developing a curriculum that promotes the ability to think, judge and express based on musical sense

研究代表者

小山 英恵 (KOYAMA, Hanae)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20713431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず、ドイツの音楽教育論を検討し、音楽的な感性に基づく音楽作品の理解過程が自己理解、他者理解、世界理解を通して螺旋的に上昇する価値判断の深まりのプロセスであること、またそれが音楽教育の領域を越えた価値観の深まりと自己形成をもたらす対話的なビルドゥングを意味することを明らかにした。また、演奏家への調査を行い、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現のプロセスの特徴が、知的論理的な判断のプロセスとは対照的に、身体知と結びついた音楽的感性による理解と判断、およびその判断の総合性、可変性、複雑性にあることを明らかにした。これらの成果に基づき、音楽科の授業開発を行った。

研究成果の概要(英文)：This study was divided into three parts. First, we studied German music education theory, revealing that understanding a musical piece entails a process of self-formation through a dialogue between the world, others, and oneself (dialogic Bildung). Dialogic Bildung implies that children create new truths when experiencing various world images, sympathize with them, and critically appraise them; thus, they not only learn about the world but also develop a harmonic relationship with it, and acquire deeper self-understanding. Therefore, dialogic Bildung has significance beyond the music education field. Second, we investigated the process of pursuing expressions when playing a musical piece. Two musicians were interviewed about how they pursued such expressions. Musical expression reflects bodily wisdom, judgements based on aesthetic senses or feelings, complexity, synthesis, and variability. Third, based on our results, we developed and practiced a music education lesson plan.

研究分野：教育方法、カリキュラム、音楽教育

キーワード：音楽的な感性 思考・判断・表現 カリキュラム 対話 ビルドゥング 音楽の教授学的解釈 エーレンフォルト 演奏家

### 1. 研究開始当初の背景

近年、学校教育において育成すべき資質・能力として、「思考力・判断力・表現力等」が挙げられている。このことを受け、音楽科においては、子どもたち一人ひとりが自らの音楽的な感性を働かせて思考・判断することを通して音楽活動が求められている。しかしながら、研究代表者がこれまでフィールドワークを行った音楽科の授業においては、子どもたちの思考・判断が他教科において圧倒的に多くの訓練を受けてきたような知的な思考・判断へ偏りがちであり、音楽的な感性に基づいた思考・判断を行うことが難しいという問題がみられた。この状況では、本来音楽科で育成すべき音楽的な感性に基づく思考・判断の力が育成されないおそれがあるのではないかと、本研究の出発点となった問題意識はこの点にある。

### 2. 研究の目的

そこで、本研究では子どもたちに音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力を育成するために効果的な音楽科カリキュラムを開発することによって、知的な思考・判断に偏りがちな従来の音楽科の授業に、感性的な思考・判断をもたらし、授業改善を図ることを目的とした。具体的には、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現プロセスの解明、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力の育成のための理論の検討、アクション・リサーチにおける授業開発を行うことを通して、子どもたちに音楽的な感性に基づく思考・判断の力を育成し、自らの感性をはたらかせて音楽を追究することを効果的に促すカリキュラムを開発することを目ざした。

### 3. 研究の方法

研究は以下の方法で行った。

(1) 音楽専門家における音楽表現追求のプロセスを調査し、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現のプロセスを解明する。

(2) 子ども個人の個人的な生の地平において音楽作品を理解することを目指すことを主張するドイツの音楽教育の理論と実践に関する検討を通して、音楽的な感性に基づく音楽鑑賞のプロセス、および音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力を育成するための音楽科カリキュラム開発の示唆を得る。

(3)(1)および(2)の研究結果をふまえ、協力校において開発研究(アクション・リサーチ)を行うことによって、音楽的な感性に基づく音楽科の授業開発を行い、その効果を検証する。

### 4. 研究成果

本研究の主な成果は、次の3点にまとめられる。

(1) まず、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現のプロセスを明らかにするために、音楽演奏家へのインタビュー調査および演

奏シミュレーション調査を行い、音楽演奏における表現追求プロセスについて明らかにした。音楽表現追求のプロセスは、楽曲の概要の把握と身体知の獲得の段階、および「納得する」「こうしたい」「落ち着くところ」を追求する段階という2つの段階によって捉えることができる。ただし、これらの段階はときに往還するものである。

楽曲の概要の把握と身体知の獲得の段階では、暗譜しとまらずに演奏できるようになることが目指される。その過程は、単に技術的、技能的な問題を解決するものではなく、繰り返し演奏しながら楽曲を分析的に理解し、楽曲の味わいや魅力などを感覚的、感性的に理解する過程である。このような楽曲の把握を伴う身体知の獲得は、次の段階において音楽的な感性に基づいて思考・判断するための基盤となっている。

「納得する」「こうしたい」「落ち着くところ」を追求する段階の作業は、音イメージとその音を出すための技術(身体知)が連動して想起されることによって進められる。追求の手がかりとなるのは、1. 楽曲分析の成果、2. 感覚的に得た味わいや魅力、3. 歌詞の内容や作詞者のことば、4. 他者の演奏、5. 自分の演奏の録音に基づく省察、6. 繰り返し演奏するなかでみえてくること、である。これらの手がかりが複雑に絡み合い、総合され、最終的には理屈ではなく自分の感性によって納得する表現へと行きつく。ただし、その納得した表現は、楽曲と対峙するなかで変化していく。

音楽の表現追求における思考・判断のプロセスは、文字からの知識、論理的な整合性や不変性・一貫性に基づく知的な思考・判断とは異なり、身体知、身体性と結びついた音楽的感性による理解と判断、その判断の総合性および可変性に特徴をもつものと考えられる。このプロセスモデルから、音楽科の授業へのヒントとして次の2点を挙げることができる。

1点目は、身体知の重視である。身体知は、暗譜や止まらずに演奏できるなどの身体による楽曲理解、および音イメージとその音イメージを実際の音にするための技能がセットになった知という2つによって捉えられる。学校教育は時間が限られている、また音楽の専門家を育てるわけではない、といった理由で習得に時間のかかる身体知を軽視することは、そのまま音楽的な感性による思考・判断を難しくすることにつながることを示唆される。

2点目は、音楽表現追求の営みの複雑性、総合性、可変性の理解である。演奏者自身が「納得する」表現の判断は、自己内対話の問いのもとで演奏家の身体に蓄積されたこれまでの知識や経験等の多様な要因が複雑に絡み合い、総合されて、いわば受動的に「落ち着く」という感覚が出てくるものであり、「こうだからこうしたい」といったような単

純な因果関係によっては説明できない判断である。また、その判断は固定されたものではなく常に変化するものである。それゆえ、授業においてよく行われているように、なぜそのように音楽表現を創意工夫したのかについての理由や根拠を一つの単純な因果関係として示すことを求める学習には注意を払う必要がある。

(2) 次に、ドイツの音楽教育論の検討を通して、音楽的な感性に基づく音楽作品の理解過程とその育成のあり方、およびその意義を明らかにした。具体的には、ドイツの音楽教育学者エーレンフォルトによって提唱された「音楽の教授学的解釈」の理論について研究した。「音楽の教授学的解釈」とは、音楽作品の適切な了解への言葉による導きと定義される。エーレンフォルトは、音楽作品の了解の構造を、音楽作品とその作品に関与する人間との対話的循環に見出す。その基礎理論は、ガダマーの哲学的解釈学にある。音楽作品の了解に関するこの見解を提唱することによって、エーレンフォルトは、音楽理解における主観・客観二元論を存在論的に克服する。音楽作品の了解に関するこの見解は、音楽作品の真理の経験が音楽作品のなかだけでなくむしろその作品に関与する人間の生のなかにあること、また「生活世界」が音楽の了解の土台となること、さらに音楽作品の了解は自己理解の意味をもつことを示す。この見解の意義は、主観的あるいは客観的といった一面的な音楽受容ではなく、音楽作品との心から「合意」という了解の様相を提示した点にある。

このような音楽作品の了解をもたらすための教育方法を示すために、エーレンフォルトは、対話的循環を教育的仲介のモデルとして用いる。この対話的循環は「生活世界」を土台としなければならない。対話的循環においては、音楽作品に対する共鳴と批判を繰り返しながら子どもの「先行判断」が修正されていく。そのためエーレンフォルトは、この対話的循環を、経験と価値判断の成長という生涯続くプロセスとして捉える。音楽の授業においては、この対話的循環がもたらされなければならない。その際、音楽作品の事柄を指導する局面と、子どもの個人的な経験を扱う局面という2つの局面を顧慮することが求められる。さらにエーレンフォルトは、対話的循環のモデルに、音楽の授業における対話的ビルドアップの意味を見出す。対話的ビルドアップとは、世界と自己の対話を通じた自己形成のプロセスである。このようなエーレンフォルトの教育的仲介の理論の意義は、ドイツ教育学をふまえれば、音楽作品についての事柄を意図的に指導する教育(Erziehung)の要素を、個人的な経験を土台とする自己形成という対話的なビルドアップ(Bildung)のなかに位置づけたことに見出される。

エーレンフォルトは、対話的ビルドアップの考えを音楽の授業においてのみでなく、学

校教育の使命として認識することの必要性を説く。社会において有用なコンピテンスや資格の獲得を志向する今日の教育学とは対照的に、対話的ビルドアップの考えは実存的視点をもつ。それは、対話的ビルドアップのプロセスのなかに教育(Erziehung)を位置づけることによって、子どもたちが様々な世界像を学び、共鳴と批判を繰り返しながら、世界と「合意」し、自己理解を進めるなかで、新たな真理を創造していくという教育的展望を呈示する。ここに、エーレンフォルトによる対話的ビルドアップの考えが有する、音楽教育領域の枠を越えた教育一般における意義が見出される。

(3) 以上の成果をふまえて、学校教育現場において教師とともに音楽鑑賞の授業を開発した。昨今、思考・判断・表現の力を育成するための教育方法としてアクティブ・ラーニングが求められている。とくに(2)の研究成果に基づけば、音楽科におけるアクティブ・ラーニングは、先人による音楽文化の内容や方法を深く理解することと、それらにアプローチしながら創造的な行為を行い、自分にとっての意味や価値を創りだしていくこと、すなわち音楽文化の深い理解と子どもたちの創造的行為の統合に見出される。すると、音楽科の学習のプロセスは、自分と異質なあるいは同質な世界としての音楽文化(作品、技、素材、方法等)に関わり合いそれらと対話しながら自らの生における創造的な行為としての表現や鑑賞を営み、その経験と価値判断を深めていく、こうした螺旋状に高まっていく子どもたちの学習のイメージとして捉えられる。

そのうえで、このようなプロセスをもたらすためには、各単元において焦点化される個別の知識や技能を、表現と鑑賞の創造的な営みを深めていく契機として捉えることが鍵となると考えられる。このことを実現するために、パフォーマンス課題を活用することを試みた。

教育現場での共同研究により、中学校第1学年の鑑賞領域の単元「情景と曲想の変化のかかわり」において、パフォーマンス課題「エッセイ『私が聴いた「ブルタバ」を書こう』を開発し、この課題をゴールとする授業を行った。この単元は、連作交響詩「我が祖国」の「ブルタバ」(スメタナ作曲)を鑑賞教材とするものである。パフォーマンス課題を活用することにより、一般的な楽曲解説や楽曲紹介ではなく、個人的な経験や見解を綴ることを主とするエッセイをゴールにすることによって、楽曲の知識や、情景と曲想の変化のかかわりの理解にとどまらず、それらを通して自らの感性による主体的な鑑賞を深め、自分にとっての楽曲の価値を見出すことを求めるものである。また、楽曲とはじめて出会う瞬間からつねに、子どもたちが自らの感性で楽曲全体と深く向き合うことができるように、「『ブルタバ』の音楽はどんなことを

語りかけてくるだろう」という自己内対話を促す発問を用いた。この発問によって、きれいだった、暗い感じ、明るい感じといった表層的な印象にとどまらず、「どうにもならない心のなかの葛藤」「失敗を乗り越えて成功した達成感」等を感じとる姿がみられた。また、子どもたちのエッセイには、「激しさ、音の大きさ、強弱などが増す。急流を表しているのだ。が、私はこのF(聖ヨハネの急流の場面)では川の急な流れとともに、ドイツへの不満、憎しみ、反感、対抗、抵抗といったものも表されている気がする」(括弧内研究代表者)といった内容がみられた。ここには、解説にあるブルタバ川の情景、楽曲の背景としてのスメタナの祖国独立への思い、情景とそれを表す音楽的な特徴(曲想)とのかかわりなどの学習内容をふまえながら、自分の感性によって音楽を聴き、価値づける鑑賞の営みを見ることができた。

最後に、以上の研究成果において特に当初予期していなかった成果として2つの点を特筆したい。一つは、音楽的な感性に基づいて学習者と音楽作品との合意を目指す学習が、その本質において、単なる作品理解をこえて、他者との共生を志向する価値観の形成や自己形成に結びつくことを明示した点である。ドイツの音楽教育の理論を検討することによって、音楽作品の理解を人間と音楽作品との対話の営みとして存在論的にとらえ、そのプロセスを自己理解や他者理解、世界理解が含まれるものとして捉えるとき、音楽科の学習が、自己と自己、自己と他者、自己と世界の対話を通した価値観の形成と自己形成のプロセスとしての対話的なビルドアップの意味をもつことを明らかにした。

もう一つは、そのような他者や自己との対話のなかで行われる音楽的な感性に基づく思考・判断・表現のプロセスの特徴が、可変性、複雑性(単一的因果関係に依らないこと)、身体性、総合性にあるとともに、そこでは自らが「納得する」という価値判断の規準が重要になることを明示したことである。このような特徴を理解することは、常に唯一無二の正解やいわゆるハウツーを求める傾向の強い子どもたちに、生きた人間の営みの複雑性や可変性の理解をもたらすことにつながると考えられる。

これらの2点の成果は、学校における音楽教育が、音楽的な感性に基づく営みを実現するときにもたらされる、音楽学習の範囲をこえたより大きな意義を示唆するものとして提示したい。

一方で、授業開発研究においては、実際の授業を実施するにあたって、具体的な対話のありようなどの詳細な方法論に関する知見が不足していることも明らかになった。その解明は課題として残されている。

本研究においては、音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力をどのように育成するのかについて研究するなかで、そのような音

楽学習がその本質において共生のための価値観の形成や自己形成に結びつくという認識を得た。このことから、2017年改訂学習指導要領において課題となっている教科の深い学びと資質・能力の育成を融合する1つの展望を得ることができたといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

小山 英恵、音楽演奏における表現追求プロセスについての研究 演奏家へのインタビュー調査・演奏シミュレーション調査から、鳴門教育大学研究紀要、査読無、33巻、2018、410 - 425

小山 英恵、C.リヒターの「音楽の教授学的解釈」 K.H.エーレンフォルトの理論との相違に着目して、鳴門教育大学研究紀要、査読無、32巻、2017、150-160

小山 英恵、戦後音楽科教育の発展史、鳴門教育大学研究紀要、査読無、31巻、2016、76-87

小山 英恵、K.H.エーレンフォルトの「音楽の教授学的解釈」 対話的ビルドアップの概念がもたらす意義、教育学研究、査読有、82(3)、2015、389 - 401

〔学会発表〕(計2件)

小山 英恵、K.H.エーレンフォルトによる音楽を聴くことの教育 音楽と聴き手との対話を促す仲介の理論と実践、日本音楽教育学会第46回大会(研究発表)、2015

小山 英恵、「音楽の教授学的解釈 (Didaktische Interpretation von Musik)」の理論 K.H.エーレンフォルトによる主張の意義と課題、日本音楽教育学会第45回大会(研究発表)、2014

〔図書〕(計5件)

小山 英恵 他、よくわかる教育課程 第2版、ミネルヴァ書房、2018、242(136-137,138-139,186-187)

小山 英恵 他、芸術表現教育の授業づくり 音楽、図工・美術におけるコンピテンシー育成のための研究と実践、三元社、2017、307(43-60)

小山 英恵 他、戦後日本教育方法論史(下) 各教科・領域等における理論と実践、ミネルヴァ書房、2017、274(141-160)

小山 英恵 他、「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか、明治図書2016、143(66 - 75)

小山 英恵 他、新しい教育評価入門  
人を育てる評価のために、有斐閣、2015、286  
(117-118)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小山 英恵 (KOYAMA, Hanae)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号： 20713431